

歴史に学ぶ

大阪経済大学客員教授・経済評論家 岡田 晃

第十一回 「東の渋沢栄一」と肩を並べた「西の五代友厚」

昨年は、渋沢栄一がブームとなつた。本連載第一回（二〇二一年五月号）で指摘した通り、渋沢の生き方とその思想は、現在のコロナ禍を生き抜くための経営のヒントと元気を与えてくれる。その渋沢栄一とともに「東の渋沢、西の五代」と並び称せられたのが五代友厚だ。この二人には驚くほど共通する点が多い。幕末に欧州を訪問して多くを学び、その経験を活かして明治新政府の役人として、次いで実業家となつて日本経済の基礎を築いた。その間に何度も危機を乗り越えてきたことも共通する。

薩英戦争で英國の捕虜となる うあらぬ嫌疑で潜伏生活

一八三六年、薩摩藩士の家に生まれた五代は、

藩主・島津斉彬の側近に取り立てられ、一八五七年に長崎に派遣された。幕府が設立した長崎海軍伝習所の伝習生となり、航海術や砲術などを学んだあと、藩の『長崎駐在員』として、外国船の買

い付けや貿易業務を担当した。その数年間に少なくとも二回は上海を訪問し、二度目の船上で高杉晋作と出会っている。長崎時代にはこのほか、英国商人のトーマス・グラバーや桂小五郎（木戸孝允）、坂本龍馬、岩崎弥太郎などとも親しくなつた。こうした経験がグローバルな視野を広げ、後の活躍の基礎を作ることになる。

しかし一八六三年、人生最大の危機が訪れた。その前年に起きた生麦事件の賠償要求と報復のため、英國が艦隊七隻を鹿児島湾奥まで侵入させ、薩摩藩所有の蒸気船三隻を奪い取つて焼き払った上、鹿児島市街地を砲撃したのだ。薩英戦争の勃発である。薩摩藩も海岸から大砲で反撃して英國側に一定の損害を与えたものの、鹿児島城下は火の海となつた。

ピンチをチャンスに変える う渡英し、銃器や機械を大量購入

この時、英國に奪い取られた船の守備責任者の一人が五代だった。五代は「火薬庫に火を放ち自爆しよう」としたが、もう一人の責任者だった松木弘安（寺島宗則・後の明治政府外務卿）に「大

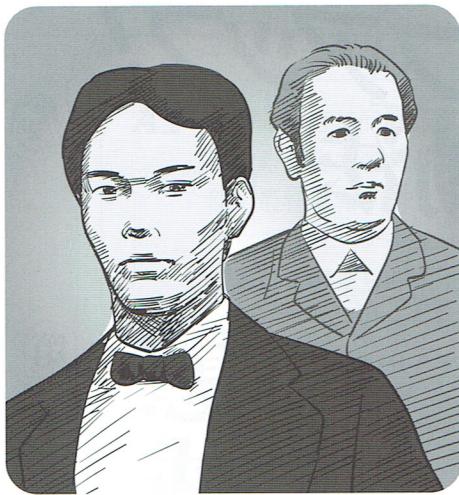
死にだ」と諭され思ひとどまつたという。結局、二人は英國の捕虜となり、横浜まで連行された。二人は横浜で解放されたものの、新たなピンチが待っていた。薩摩藩内から「藩船守備の責任者は恥だ」との批判を受け、「薩摩藩の内情を英國に売り渡したスペイだ」との風説まで流れたのだ。このため薩摩に帰れず、武藏国熊谷や長崎で一年近くの潜伏生活を余儀なくされた。この頃、薩摩藩家老・小松帶刀が五代に同情して上海への亡命を勧め、数百両を用意したという話が残っている。それほど深刻な状況だった。

しかし五代はそれを断つた。ここで亡命すれば自分へのいわれのなき攻撃に負けたことになると考へたのだろう。その上で、藩への上申書を提出するという思い切った手に出た。

上申書は一万字を超える長大なもので、世界情勢を説いた上で薩摩藩の進むべき道は富国強兵、特に富国が重要とし、そのために海外貿易を進興すこと、十数人の藩士を欧州に留学させることなどを提案している。これらは後の薩摩藩の針路となるだけでなく、明治以降の日本の経済発展を先取りする内容だった。潜伏生活という苦しい中でも高い志と使命感を持ち続け、じっくり構想を練つたことがうかがえる。

五代のこの熱意と迫力は、藩を動かした。小松帶刀の助力もあって彼の提案が採用され、五代自身が藩士を引き連れて英國に渡ることになったのである。ピンチをチャンスに変えるとは、まさにこのことだ。

一八六五年、五代ら十九人の薩摩藩士は三ヵ月の船旅を経てロンドンに到着。五代は十五人の若い藩士をロンドン大学で学ばせ、自らは英國や歐州各地を訪問し銃器類や機械を次々に購入して



さらに五代は歐州滞在中に新たな「建言書」をまとめ、藩に送っている（実際に提出されたかは不明との説もあり）。そこでは、「商社^{（こうしゃ）}合力」によって富国を実現させることを提案している。「商社」とは会社、「合力」とは共同出資や共同事業のことで、五代が欧州で知った株式会社をイメージしたものだ。渋沢栄一の「合本主義」と基本的に同じだが、渋沢が欧州で「合本」を知った一八六七年より二年先んじている。

こうした五代の欧州経験はすべて明治以降に活かされることとなる。大阪の多くの経済人と協力

いった。中でも、当時世界最大の紡績機械メーカーを訪れて、約百二十台の機械の一括購入と技術指導の契約を結んだことは特筆に値する。これを受けて薩摩藩は鹿児島で日本初の機械式紡績工場を建設した。百二十台もの機械が蒸気機関で一斉に動く光景が、明治維新以前に出現していたのである。その跡地の隣接地には、英國から派遣された技師七人の宿舎が現存しており、「明治日本の産業革命遺産」の一つとして世界遺産に登録されている。

筆者は数年前、英國での五代の足跡をたどった。マンチエスターからタクシーで一小時間ほどの静かな街の一角で、その紡績機械メーカーの本社だった建物を見つけた時は、「このような所にまで足を運んだのか」と大いに興奮し、同時に五代の的確な判断力と行動力を実感できた。

「商社合力」～数多くの企業を設立

さ

る

それでも五代は困難や批判を乗り越え、大きな足跡を残した。アフタークロナに向けて、我々が五代から学ぶべき点は多い。もつと知つてほしい人物である。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。
編集委員を経て、テレビ東京出向、「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ（米国現地法人）社長、理事・解説
委員長を務める。二〇〇六年から現職。

して、大阪株式取引所（後の大阪証券取引所、現・大阪取引所）や大阪商法会議所（現・大阪商工会議所）をはじめ、大阪商船（現・商船三井）、阪堺鉄道（現・南海電気鉄道）など、数多くの企業を設立した。明治初頭の一時期、衰退していた大阪経済は、五代の活躍によつて立ち直り発展を遂げていったのだ。

五代の事業は、①当時の日本と大阪にとつて必要な事業、つまり時代のニーズを的確に判断する

②一貫したグローバルな視野③多くの経済人と協力して実行——などが特徴だ。いずれも今日の企業経営においても重要な要素である。

だが五代の「商社合力」はすべてが順調だったわけではない。他の経済人と協力するという発想が当時の日本にはまだほとんどなかつたため、理解を得るのに苦労したようだ。中には失敗した事業もある。さらに、北海道開拓使の払い下げ問題をめぐり「政商」と批判された。これはいわれのないものだつたが、今日にまでそのイメージが続いているのは極めて残念なことだ。

それでも五代は困難や批判を乗り越え、大きな足跡を残した。アフタークロナに向けて、我々が五代から学ぶべき点は多い。もつと知つてほしい人物である。